

# 『瞑想詩集』における太陽

長谷川 毅 彦

## はじめに

1820年に発表された『瞑想詩集』*Méditations Poétiques* はラマルチーヌの処女詩集であり、彼の作品のなかでもとりわけ評価が高い。

本稿の目的は、「太陽」という概念を鍵として、『瞑想詩集』におさめられている詩篇が、その制作時期が後期になるに従い、次第にその詩的世界像を深化させているということを明らかにすることにある<sup>1)</sup>。また、それとともに世界像の変化が、ラマルチーヌの恋人ジュリー・シャルルによってもたらされていることが明らかに<sup>2)</sup>なるだろう。

## 1. 『瞑想詩集』初期の太陽

はじめに1814-1816年に執筆された『瞑想詩集』の初期の2詩篇「バイア湾」*Le Golfe de Baya* および「わかれ」*Adieu* における太陽を検討する。

「バイア湾」において太陽は、テティス *Thétis* という表現をもちいることによりギリシア神話の枠組みのなかでとらえられた海と、「夜の女王」*reine des nuits* という、帝政期に頻繁に用いられた迂言法により表現される月とともに登場する。ここでは太陽は絵画的描写の一要素としてあつかわれているといえよう。

Plongé dans le sein de Thétis,

Le soleil a cédé l'empire

A la pâle reine des nuits.

(Golfe de Baya, v. 17-19)

テティス神の胸に沈み  
 太陽は帝国を  
 蒼白き夜の女王に譲った  
 （「バイア湾」17-19行）

Adieu における太陽は、やはり神話風に解釈されている。その太陽には、生命力との結びつきが感じられる。

Nous ne verrons plus le soleil,  
 Du haut des cimes d'Italie  
 Précipitant son char vermeil,  
 Semblable au père de la vie,  
 Rendre à la nature assoupie  
 Le premier éclat du réveil.  
 （Adieu, v. 16-21）

もはや我々は、太陽が  
 イタリアの山のいただきから  
 朱色の車を駆り  
 生命の父のごとく  
 まどろむ自然に、めざめの最初の輝きを  
 かえすのを、見ることはない。  
 （「わかれ」16-21行）

1814-1816年に書かれた「バイア湾」および「わかれ」においては、太陽と神とは関係づけられていないのである。

## 2. ジュリー・シャルルとの出会いと太陽

次に1816-1817年7月の太陽を検討する。この時期ラマルチーヌはエクス・レ・バンという湖のほとりの保養地へ行き、ジュリー・シャルルという人妻と出会う。二人は激しい恋をする。この時期の作品には「祈願」Invocation, 「寺院」Le

Temple, 「太陽賛歌」 Hymne au Soleil がある。これらの詩篇には光に関連した語彙が満ち溢れている。

「祈願」には「永遠の光」という表現で、あの世の世界の光源らしきものが登場する。

Vas-tu revoir demain l'éternelle lumière?  
Ou dans ce lieu d'exile, de deuil, et de misère,  
Dois-tu poursuivre encore ton pénible chemin?

(Invocation, v. 9-11)

明日、君は永遠の光をふたたび見に行くか  
それとも流涕、悲しみ、悲観のこの地に  
つらい道を続けるのか

(「祈願」 9-11行)

「太陽賛歌」は題名から読み取れるように、太陽が主題であり、太陽に関する記述が多い。前半部に登場する太陽は、初期の詩篇「わかれ」同様に、神話風の枠組みのなかで位置づけられており、生命力とむすびついている。

Mais la nature aussi se réveille en ce jour!  
Au doux soleil de mai nous la voyons renaître;

(Hymne au Soleil, v. 8-9)

だが自然もこの日に目覚める  
五月の穏やかな太陽で、それがよみがえるのを見る。

(「太陽賛歌」 8-9行)

Je veux voir le soleil s'élever lentement,  
Précipiter son char du haut de nos montagnes,

(Hymne au Soleil, v. 14-15)

私は太陽がゆっくり昇り  
山の頂きから車を駆るのを見てみたい

(「太陽賛歌」 14-15行)

「太陽賛歌」の第三節すなわち22-33行において、神が太陽を軌道に投げ入れたものであること、そして太陽が不変であることが歌われる。

L'Eternel te lança dans ta vaste carrière

(Hymne au Soleil, v. 27)

神がお前(=太陽)を軌道に投げ入れた

(「太陽賛歌」27行)

Et sous la main des temps ton front n'a point pâli!

(Hymne au Soleil, v. 33)

時の手の下、お前の額は少しも色褪せない

(「太陽賛歌」33行)

第4節つまり34-35行では、神が太陽の「至高の創造者」とであるとされる。しかし、一方で、太陽の光線で、神が魂に入りこむのではないのか、そして太陽あるいは太陽の光線は、神の腕、神の栄光、神の視線ではないのかと歌われる。つまり「太陽賛歌」においては、太陽は神に創造されしものと想定されるが、同時にラマルチャーヌは、太陽が神の一部である可能性を感じているのである。

Il me semble qu'un Dieu, dans tes rayons de flamme,

En échauffant mon sein, pénètre dans mon âme!

Et je sens de ses fers mon esprit détaché.

Comme si du Très-Haut le bras m'avait touché!

Mais ton sublime auteur défend-il de le croire?

N'es-tu point, ô soleil! un rayon de sa gloire?

Quand tu vas mesurant l'immensité des cieux,

Ô soleil! n'es-tu point un regard de ses yeux?

(Hymne au Soleil, v. 38-45)

神がお前の炎の光線の中で

私の胸をあたため、私の魂に入りこむようだ

こてで、私の精神の汚れをとりさり

神の腕が私に触れたかのように感じる  
 だがお前の至高の創造者はそれを信ずることを  
 禁ずるだろうか？  
 お前は、おお太陽よ！  
 神の栄光の光線か  
 お前が広大な天空をはかりながら行くとき  
 おお太陽よ！お前は神の視線ではないのか？  
 （「太陽賛歌」38-45行）

### 3. ジュリー・シャルルの危機と太陽

ラマルチーヌの恋人ジュリー・シャルルは結核になる。ラマルチーヌはその病  
 を知らされ、彼女の死を予感する。1817年8月-1818年4月がこの時期にあたる。  
 このころになると作品に、陰のイマージュが入りこんでくる。この時期の詩篇に  
 は「湖」Le Lac, 「靈魂不滅」L'Immortalité, 「栄光」La gloire, 「サウルの歌」  
 Chants lyriques de Saülがある。

「湖」においては、太陽の描写は全くない。

「靈魂不滅」において、太陽は否定的にとらえられている。僅か三ヶ月ほどま  
 えに書かれた「太陽賛歌」において、「太陽のひたいは色褪せない」ことが歌わ  
 れたのとはうって変わって、「靈魂不滅」の太陽はその光彩を失ってしまってい  
 る。

Le soleil de nos jours pâlit dès son aurore,  
 Sur nos fronts languissants à peine il jette encore  
 Quelques rayons tremblants qui combattent la nuit;  
 L'ombre croît, le jour meurt, tout s'efface et tout fuit!

（L'Immortalité, v. 1-4）

今日の太陽は、黎明からすでに蒼白く  
 やつれた我々の額に、かろうじて

震える光線をいくらかなげかけ、夜と闘わせているのだ  
 陰は大きくなり、ひかりは死ぬ、すべては消え、逃げ去る  
 (「靈魂不滅」1-4行)

「靈魂不滅」の53-76行には、エピキュールの徒が言う言葉において、太陽が滅びてゆくとされる。

Cet astre dont le temps a caché la naissance,  
 Le soleil, comme nous, marche à sa décadence,  
 (L'Immortalité, v. 65-66)

この星は、時間によってその生まれを隠されている  
 太陽も、我々とおなじ、衰退にむかっている  
 (「靈魂不滅」65-66)

また、他者 un autre の言葉として、科学者の世界観らしきものが紹介される。  
 そこでは暗い空間に浮かぶ太陽が登場する。

Quand j'entendrais gémir et se briser la terre;  
 Quand je verrais son globe errant et solitaire  
 Flottant loin des soleils, pleurant l'homme détruit,  
 Se perdre dans les champs de l'éternelle nuit;  
 (L'Immortalité, v. 85-89)

大地が震え、砕けるのを聞くととき  
 さまよう孤独な地球が  
 太陽から遠くただよい、絶滅した人間を悼みつつ  
 永遠の夜のひろがりに消え去るのを見るとき  
 (「靈魂不滅」85-89行)

以上、「靈魂不滅」における、否定的にとらえられた太陽は、詩人自身の観点として、記されているものであり、あるいは他者の観点としてあつかわれているものである。「靈魂不滅」が書かれた時期、ラマルチーヌは、ジュリー・シャルルとの約束の地エクス・レ・バンにきていたが、ジュリーは病気でパリを離れら

れず、ラマルチーヌは期待を裏切られ彼女にあうことができなかったことを考慮するなら、否定的太陽の出現はラマルチーヌの精神的な危機と密接な関係があることが読み取れよう。

この他、「靈魂不滅」においては、エルヴィールの言葉として、太陽が神の視線であるといわれる。これは、ラマルチーヌの解釈に近いものであり、「太陽賛歌」における疑念から確信へおしすすめられたものである。

Le jour est ton regard, la beauté ton sourire;

(L'Immortalité, v. 117)

光はあなた (=神) の視線で、美はあなたの微笑だ

(「靈魂不滅」117行)

「サウルの歌」においては、太陽は神のしもべとして振る舞うかのようなようである。

Le soleil et la foudre ont éclairé sa route

(Chants lyriques de Saül, v. 20)

太陽といなづまは (神の) 道を照らした

(「サウルの歌」20行)

#### 4 ジュリー・シャルルの死以後の太陽

1818年7月のある日ラマルチーヌはジュリー・シャルルの死の知らせをきく。これ以後の詩篇には「信仰」La foi「孤独」L'Isolement「絶望」Le Désespoir「聖詩」La Poésie sacrée「聖週間」La Semaine sainte「瀕死のキリスト教徒」Le Chrétien mourant「神」Dieu「人間への摂理」La Providence à l'Homme「夕べ」Le Soir「思い出」Souvenir「谷」Le Vallon「人間」L'Homme「祈り」La Prière「秋」L'Automne「情熱」L'Enthousiasmeがある。

「信仰」において、太陽は、炎としてとらえられる魂の融合してゆく対象として現れる。

Hôte mystérieux, que vas-tu devenir?  
 Au grand flambeaux du jour vas-tu te réunir?

(La Foi, v. 91-92)

不思議な住人よ、お前は何になるのか  
 陽の巨大な炎とひとつになるのか

(「信仰」91-92行)

「信仰」においては、太陽がふたつ存在する。詩人が、まのあたりにしている、しかし「もう見てはならない太陽」の他に、「別の天空」の太陽が存在するのである。

Soleil mystérieux! flambeau d'une autre sphère,

(La Foi, v. 165)

神秘的な太陽よ、もう一つの天空の炎よ

(「信仰」165行)

Viens donc la remplacer, ô céleste lumière!  
 Viens d'un jours sans nuage inonder ma paupière;  
 Tiens-moi lieu du soleil que je ne dois plus voir,  
 Et brille à l'horizon comme l'astre du soir

(La Foi, v. 175-176)

だから、おお天上の光よ！それに代わりに来い  
 くもりなく陽からわたしの瞼をうるおしに来い  
 もう私の見てはならない太陽の代わりになれ  
 夕べの月のように地平線に輝け

(「信仰」175-176行)

次に「孤独」を検討する。この「孤独」は『瞑想詩集』の冒頭に配置されている。これによってラマルチーヌは『瞑想詩集』のひとつの枠組みを与えようとしたのであろうか。「孤独」において『瞑想詩集』の詩的世界観はきわまるのであり、太陽も複雑な性質をしめす。そこで、少し長くなるが、太陽に関する部分を



以下に引用する。

Le soleil des vivants n'échauffe plus les morts

(L'Isolement, v. 20)

生きる者の太陽は死者を暖めはしない

(「孤独」20行)

Que le tour du soleil ou commence ou s'achève,  
D'un œil indifférent je le suis dans son cours;  
En un ciel sombre ou pur qu'il se couche ou se lève,  
Qu'importe le soleil? je n'attends rien des jours

Quand je pourrais le suivre en sa vaste carrière,  
Mes yeux verraient partout le vide et les déserts;  
Je ne désire rien de tout ce qu'il éclaire,  
Je ne demande rien à l'immense univers.

Mais peut-être au-delà des bornes de sa sphère,  
Lieux où le vrai soleil éclaire d'autre cieux,  
Si je pouvais laisser ma dépouille à la terre,  
Ce que j'ai tant rêvé paraîtrait à mes yeux?

Là, je m'enivrerais à la source où j'aspire,  
Là, je retrouverais et l'espoir et l'amour,  
Et ce bien idéal que tout âme désire,  
Et qui n'a pas de nom au terrestre séjour!

太陽の歩みが始まろうと終わろうと

私はそれを冷やかな眼でおう

暗い空に沈もうと、澄んだ空に昇ろうと

太陽がなにになろう？ 私は陽の光に何も期待しない

そのとてつもない軌跡を辿りえたとしても  
 私の眼はいたるところで虚無と砂漠を見るだろう  
 私は太陽が照らすものは、何も欲しない  
 広大な宇宙に何も求めない

だが天球の境の向こうの  
 真の太陽がもうひとつの天空をてらしているところへ  
 地上にぬげがらをすてて行くことが出来たなら  
 私があれほど夢見たものが眼前に現れるだろうか？

そこではあこがれの泉に酔い  
 希望と愛と、すべての魂が願う、  
 この世には名前すらない理想の善を  
 もう一度見出すことだろう

(「孤独」29-44行)

「生きる者の太陽は死者を暖めはしない」ということは、「生きる者の太陽」以外に死者の太陽が存在することを意味している。そしてこの死者の太陽は38行で「真の太陽」と呼ばれている。ふたつの太陽があるのである。その違いに注意を払わなければならない。2行目に歌われる太陽と29-36行に二度現れる《soleil》と、代名詞《le》および《il》は同一である。それは「生きる太陽」であり、ラマルチーヌが「冷やかな眼でその軌跡をおう」太陽、すなわち目に映ずる太陽である。

Au coucher du soleil, tristement je m'assieds;

(L'Isolation, v. 2)

日暮れに、私はさみしく座る

(「孤独」2行)

一方38行目の「真の太陽」は宇宙の「天球の境の向こう」で「別の天空をてらして」いるのであり、ラマルチーヌの目には映じておらず、近づき難いあまりに「暁の馬車」すなわち、「生きる者の太陽」にのってちかづきたいと、ラマルチー

又に願望させるものなのである。

Que ne puis-je, porté sur le char de l'aurore,  
Vague objet de mes vœux, m'élancer jusqu'à toi,

(L'Isolement, v. 45-46)

私の願いのおぼろげな対象よ  
暁の馬車に乗り、お前まで飛んで行けたら

(「孤独」45-46行)

以上のごとく、「孤独」においては、先行する詩篇「信仰」において見られたふたつの太陽が、それぞれの特性をはっきりと示すようになっており、ひとつの太陽は、「天球の鏡の向こうの」「もうひとつの天空」の太陽で、「真の太陽」であり、「死者の太陽」であり、肯定的なイマージュをになっており、もうひとつの太陽は「生きる者の太陽」であり、天空のこちら側にあり、否定的なイマージュをになっているのである。

ふたつの太陽は、数ヶ月のあいだ姿を消しはするが、再び現れる。それは「聖週間」および「人間の摂理」においてである。そこでは一方の太陽は、もうひとつの太陽の影と表現される。

C'est ce vivant soleil, dont le soleil est l'ombre,

(La Semaine Sainte, v. 7)

それはあの生き活きとした太陽であり、太陽はその影だ

(「聖週間」7行)

Ce soleil éclatant, ombre de ma lumière,

(La Providence à l'Homme, v. 93)

私(=神)の光の影である、この太陽

(「人間への摂理」83行)

この時期に書かれた詩篇の中で、次に「神」を検討してみる。「神」において、ラマルチャーヌは、コペルニクスやニュートンの天文学的宇宙観を非難する。この

宇宙観は「靈魂不滅」においては、「他者」の言葉という設定であられ、否定的な太陽の像をつくりだしたものであった。ラマルチーヌは「神」において、今度はこの科学者の宇宙観を否定する。天文学者は、「真の太陽」＝神を見ず、神の創造したものばかり称賛しているというのである。そして、そうした誤った行為を人間が続けるならば、「真の太陽」は、この世を照らすのをやめてしまうと警告する。

Hélas! sans voir le Dieu, l'homme admire le temple  
Il voit, il suit en vain, dans les déserts des cieux,  
De leurs mille soleils le cours mystérieux!

(Dieu, v. 134-136)

なんということだ！ 人間は神を見ずに寺院を称賛している  
天空の虚無に、無数の神秘的な太陽の軌跡を  
ながめ、むなしくおっている

(「神」134-136行)

Le soleil cessera d'éclairer l'univers,  
De ce soleil moral la lumière éclipse  
Cessera par degrés d'éclairer la pensée;  
Et le jour qui verra ce grand flambeau détruit  
Plongera l'univers dans l'éternelle nuit.

(Dieu, v. 164-168)

太陽は宇宙をてらすのをやめるだろう  
この心的な太陽の、食にはいった光は  
次第に精神を照らすのをやめてしまうだろう。  
そしてこの巨大な炎が破壊された日には  
宇宙は永遠の夜に沈むだろう。

(「神」164-168行)

最後に、「祈り」を検討する。「祈り」は『瞑想詩集』の詩篇の中では、最も後

期に書かれたグループに属し、1819年秋に書かれている。

「信仰」「孤独」「聖週間」および「人間への摂理」においては、ふたつの太陽があり、一方の太陽は肯定的なイメージをにない、もう一方は否定的なイメージをになっていた。「祈り」における太陽は、その一方が変質し、肯定的イメージをになうようになる。つまりふたつの太陽が、ふたつとも肯定的なイメージをになうようになるのである。

「祈り」における一方の太陽は炎として現われた神であり、魂がそこに融合しようとするものである。そして、それはラマルチーヌにはまさに見えるものである。「信仰」や「孤独」において、「真の太陽」は「天空の境の向こう」にあり、見えないものだった。それが「祈り」においては見えるものになっているのである。

Ce monde qui te cache est transparent pour moi;

(La Prière, v. 64)

お前(=神)を隠すこの世界は、私には透明だ

(「祈り」64行)

では、もう一方の太陽はどのようなものか？この太陽は、我々の眼に映じている太陽である。そしてそれは、1818年7月－1819年6月の「信仰」「孤独」「聖週間」「人間への摂理」において、否定的にとらえられたものであった。それが1819年10月－11月に書かれた「祈り」において肯定的イメージをになってあらわれるのである。そして、この太陽は1917年6－7月、「光の時代」に書かれた「太陽賛歌」に現われる太陽の性質をとりもどし、神の「視線」と呼ばれ、神の善意を反映するものになっている。

Quand l'astre à son midi, suspendant sa carrière,

M'inonde de chaleur, de vie et de lumière,

Dans ses puissants rayons, qui raniment mes sens,

Seigneur, c'est ta vertu, ton souffle que je sens;

(La Prière, v. 74-76)

太陽が南中し、すすむのをやめ

私を熱と、生命と、光で満たすとき  
 私の感覚を活気づける力強い光線に  
 私が感じるもの。神様、それはあなたの徳であり、息吹きです。  
 (「祈り」174-76行)

## おわりに

『瞑想詩集』における太陽は、詩人とジュリー・シャルルとの出会いと別れによって、深化していった。太陽は絵画的要素から、生命力を象徴する太陽へと変化する。そこに彼岸を象徴する太陽が加わり、はじめは彼岸の太陽が肯定され、現世の太陽は否定される。それがやがてどちらの太陽もやすらかなものとなる。『瞑想詩集』の詩的世界像は大きな変貌をとげたのである。ラマルチーヌは『瞑想詩集』のひとつひとつの詩篇をうみだすとともに詩人としての成長をとげたと見えよう。

## テキスト

Lamartine, OEuvres poétiques, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1963.

## 註

- 1) 各詩篇の制作時期についてはプレイアッド版の NOTES ET VARIANTES あるいは Lamartine, Méditations, Garnier, 1968, pp. LXV-LXIX を参照。
- 2) ラマルチーヌの伝記については Maurice Toësa, Lamartine ou l'amour de la vie, Albin Michel, 1969 を参照。

(はせがわ たけひこ 仏文学)